

保育への視座(10)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

学期が終わると、殆どどの保育者の方は、子どもひとりひとりについてどのように成長したかを、整理されていることと思うが、「私の保育」についても、子どもひとりひとりとの、かかわりを通してふりかえて見られていることだろう。この「ふりかえり」は保育者の経験などから多分様々だと思う。

次に紹介するのはF幼稚園の四歳児担任の

N先生が三学期末に一年を通して「ふりかえり」をされた報告の一部である。特に三学期になって保育者が気づき自分のこれからの保育についての課題を確認されたところを紹介したい。

——もうあと少しで三学期も終わるといふ頃になって、SI児ST児K児（いずれも男児）の三人についてはクラス内の他の子どもたち

よりも多く三人の名前を呼び注意を喚起しなければならぬような、とても気になる存在の子どもではあったが、私は三人の表面的なところ（私の目に写る活動、特に私の気になる活動）にのみしかかかわって来なかったことに気がついた。この三人の子どもたちはグループで、まわりにある用具などをいろいろなものに見立ててマンガのキャラクターになるなどのごっこやままごとなどの遊びが多く、三学期になっても片づけの活動に時間がかかり、クラス全体でする帰りの活動などにおくれてしまうことがしばしばであった。少しゆとりをもって片づけのできるよう助言を

してみたりしては見たが、スムーズにできなくて、私が一緒に片づけることをすることによってやっと何とか片づけられるようになって来た。私が子どもたちをことばで追い廻すようなことから一緒に行動することに、やっ

と気づいたことに私自身ショックでもあった。またその片づけの時に「ケーキやさんだったみたいね」とその時使った用具などを片づけながら話しかけた時、その中の一人が「食べに来てくれんやったね」とぼつり。そのことばにまたまたショックだった。

そうだこの三人の子どもたちは毎日元気に遊んでいるように見えていた。また日常的な会話もよくして来っていた。しかしふりかえてみると、遊びを通しては、その内容やイメージにふれたり、要求を理解するようなかわりはほとんどしていなかったことに気づかされた。

つまり、私の方に要求して来たり、かかわりをもとうとしてこないで、自分たちなりに遊び込んでいるように見える子どもたちには、「遊んでいるからいいわ」となっていたのである。子どもの自発性、自主性にかこつ

けて、積極的に関心をもつ姿勢ではなかった自分が見えて来た。

このようなことに気づいた数日後に、年中組で、じゃがいもの苗を植えにバスで出かけた。その日は三月のとても暖かい日で苗植えも早く済み、近くの広場でお弁当を食べることにした。食事後、子どもたちは目を輝かせてころげまわって遊んだり、少し離れたところへ「ほうけん」といって出かけて行っては戻って来て、私に「川があったよ」「虫がいたよ」「他の幼稚園の人も来ているよ」など見たこと発見したことを報告してくれていた。また小さい名も知らぬ草花を「おみやげ」といってもって来てくれたりもしていた。その時、小川の方から大きなビニール袋を重たそうにひきずるように持って来る前述の三人の中のS1児の姿が見えた。一瞬、「うわあ、今度は何をしてくれたんだろう」と日

頃の行動のことから心配が頭の中をよぎった。しかし、とにかく落ちついてよく話をきこうと思ひ直し、たずねてみた。するとS1児は「おみやげ。川の水がきれいかったけんもってかえつと」とあたりまえのようにこたえた。私はいままでにこんなすごいおみやげを見たことも聞いたことも（もらったこともの意味）なかったもので、よもやそんなことを考えつくなんてと、とても驚き感動した。S1児らしい個性的な発想のおみやげについて笑ってしまったが、私の心の中では本当にバスにまで持ち込んだらどうしようかと心配も生じた。その私の心配が通じたのか、しばらくして川に水を戻し、また別の場所に出かけた。私はこの時のS1児の発想に驚かされたこともあってS1児のあとを追うように付いていった。そして池の側に立って池の中を見ようとしているS1児を見つけたが、その池はとて

大きく深そうだったので「余り近づくとあぶないよ。落ちたら先生助けらんよ」とすぐに言ってしまった。しかしそんなことばにはまったく耳をかさず、池の縁の石の先に足をのせてのぞき込む、また少し歩いてのぞき込む、の繰り返し。背後から何度声をかけても同じことだと思い、彼のすぐ背後を付き添うようにして付いて廻った。S1児なりに池を観察して廻り気持ちは満足できたように思われた。S1児には私が背後を付添うように心配しながら一緒にまわっていることを感じているようにも汲みとれた。このことによってS1児と私はとても近づけたように感じた。

この日のことをふりかえってみると日常の園生活の中では危険そうだと気づくと（限度もあるが）すぐ「あぶないから」、不潔なように感じると「きたないから」と制限ばかりで子ども自身の体験の場を減らし、さらにその中から生まれ出てくるかも知れない発想や創造性などの芽をつみとっていたのではなからうかという気が強くして来た。——と。

ここで保育者自身気づかれたことは、

- (一) ことばかけだけによるさせようとするこの前に保育者も子どもと共に生活すること
- (二) 遊んでいるからいいわと見放さないで積極的関心をもつこと
- (三) 子どもの要求の理解とそれを共感し共有しようとする（時に方向づけたり、制限することも必要）

は、いずれも保育者の保育の姿勢の基本として常に心して行きたいことだと思う。このことは前回までの「保育への視座」の中でいろいろな角度からとりあげて来た事からでもあるが、こうしたことはなかなか講義や講演を聴いたりして気づいたり、見直したりできることではないことを若い保育者の方々も少し

ずつ学んで来て下さっていることと思う。

それは「私の保育」実践の中で、子どもとどうかかわって来たか、どうかかわっているかなどをあるがままに（保育者の心持ちや心の中をありのままをことばにしてみることに）見つめ、さらにそれを書きとめることにつとめていくしかない。なお、前述のN先生の事例に即して欲を言えば、例えばS児が水を「おみやげ……」と持って持って来てくれたとき、驚きや心配やいろいろ複雑な心持ちは伝わって来たが、どのようにそれを受けとめられたのか。表情までは記述できないにしても、言動はあったのかなかったのか、今少し記述してくださればその「かわり」の姿勢が自分にも他人にもよくわかったと思われるので、保育者自身のことばかけを心持ちと併せて記述してみられるとよいと思う。そしてそれを教師仲間に聴いてもらったり、読んで

でもらって、コメントがあればそれをいただかれるとよい。

このようにして気づいていく道程がとても大事なことである。この道程が真の「私の保育」への道をつくっていくことなのだと思う。インドの詩人で哲学者であるタゴールのことばの中に「道のある場所では、私は私の道を失う」ということばがある。

あたえられた道だけを歩もうとし易い。また、そういう教育を受けて育って来ている面も強い。

子どもたちは、どうであろうか。子どもたちにも私たちの道を歩ませてやりたいと思う。

「私の保育」への道も私がつくっていくしかない。子どもたちと私たちの仲間や先達に支えられながら。

（元・洗足学園短期大学）